

ベストピア Bestopia

小原靖夫

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成二十三年五月
第二九一号

世界からオーケストラに乗って。 東日本大震災へ祈りとエール

まず今月の写真についての話から始めます。ウィーンのコツェルトハウスに掲げられている日の丸です。誰が見ても日本のことと判りますが、内容は来る6月26日、日本のためにチャリティ・コンサートを行いますという宣伝です。指揮者 Georg Nigl 等演目がかかげられています。今もって世界は東日本大震災を憂い祈り自分たちに来ることを出来る場で、何かをしようという意志を持っています。音楽界が被災者にどのような動きをしていたかを見てみました。

(1) 世界の動き

東日本大震災に対して最初にしかも突然に Benefit (恩恵、相手に対して利益をもたらす行為、チャリティ) を申し出たのはイタリアのパッパーノ指揮するサンタ・チェチーリア管弦楽団です。3月12日夜(7時間遅れの差があります) 後半の始まる前に突然、指揮者が「この演奏会を日本の地震の被害者に向けて捧げたい」と告げ、会場は大きな拍手に包まれた。取材をされた後藤菜穂子さんは胸一杯になり、終演後お礼を言うと、彼は「これぐらいしかできないけれど、私たちの思いは日本の皆さんと共にあります」と語ってくれた。(以下引用は音楽の友5月号からです。)

3月15日 ベルリン・シュターツカペレ、指揮者サイモン・ラトル、ピアノ独奏バレン

ンボイムという豪華版、ベルリン州立歌劇場の改修費用を募る慈善コンサートであった。

開始前に黙祷が捧げられ、バレンボイムは『大地震の犠牲者と生存者に思いを馳せる』と語っている。3月29日ベルリン・フィルハーモニーと合同でチャリティコンサートを実施前半はバレンボイム指揮、チャイコフスキーの「悲壯」後半はラトルによるブラームスの「交響曲第4番」であった。

3月16日 ベルリン・フィル、指揮はハイティング、定期演奏会のプログラムを一部変更してルトスワフスキの「弦楽のための哀悼曲」を演奏、黙祷、メッセージを残している。

3月17日 パリ管弦楽団、パーヴォ・ヤルヴィ指揮、黒いネクタイをそろって締められた楽団員とヤルヴィが一体となった演奏に、被災者への想いが静かに聞き手の耳に伝わった神秘的な演奏会がもたれた。その日のプログラムには「日本の震災被害者にパリ管弦楽団はこの二日間の演奏会を捧げます」との折り込みがあった。

3月17-18日 ミュンヘン、バイエルン放送交響楽団。当日配布のプログラムには「この公演は震災の犠牲者に捧げられます」と書かれていた。指揮者のヤンソンスは冒頭に「あまりにも衝撃的な災害に見舞われた日本の友人たちのために、心からの音楽でメッセージを伝えたい」とのスピーチをされ、グリーグの「ソルヴェイグの歌」が演奏された。団員一人一人の心からの思い、

震え、叫びが伝わってくるような美しい音楽、最後の音が消え入ると、ヤンソンスは指揮台から降りて静かに袖の方へ。そこで団員が立つと、自然に聴衆の皆さんも立ち上がり、全体での黙祷となった。

3月18日 英国ロイヤル・バレエ団、当日の2回の「白鳥の湖」が日本の人々に捧げられた。開演前にモニカ・メイソン監督が舞台に立ち「日本の悲劇に私たちは心を痛めておりますが、きわめて困難な状況の中でも日本の皆さんが尊厳を持って毅然と行動していることに頭が下がります」と述べた。

3月18日 フランス国立放送管弦楽団はジャン・シエン指揮の定期演奏会の収益をユニセフを通じて被災者に送った。

3月19-20日 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とダニエル・バレンボイム指揮者は二日間の楽友協会での定期演奏会の前に公式プログラムに先立ち、東日本大震災の犠牲者に対する追悼演奏を行った。モーツァルトピアノ協奏曲23番 K488から第2楽章アダージョをバレン・ボイムが独奏と指揮をかね、その後ほぼ2000人の聴衆とともに黙祷を捧げた。

3月26日 モンゴル、ウランバートル国立文化宮殿ホールで文部省及び国立音楽、舞踏大学の主催で「日本の子供たちを支援するチャリティ・コンサート」が行われた。

「私たちは心から日本の被災者の皆さんに少しでも早く、平安な生活が訪れるように祈っています。これは全モンゴル国民の気持ちです」との理事長エルデネバット氏の談話も添えられている。

3月27日 スイス、チューリッヒ歌劇場

管弦楽団は主席指揮者ダニエル・ガッティによるフィルハーモニー・コンサートを日本の犠牲者に対する慈善演奏会とした。マーラーの「交響曲第九番」であった。

(2) 日本国内の動き

3月12日 神奈川フィルハーモニー管弦楽団、私も賛助会員になっており成長を楽しみにしている若いメンバーが多い、場所はみなとみらいホール。指揮者は金聖響氏、定期公演であるので演目は始めから決まっていましたが、マーラーの『交響曲第6番』(悲劇的)となってきた極めて予言的な感じ、オーケストラはもちろん聴衆も第1楽章の冒頭からテンションの剛いサムシングを醸成させていたといえます。聴衆は70余名(通常は1200名)。

フィナーレの高鳴る金管たちの炸裂が人知の底知れぬ、真実無尽の力と感じられ、弦楽器の歌う旋律は悲劇を超えた歌となり、全曲1時間余、全身全霊を尽くした演奏であった。

3月16日 大阪フィルハーモニー交響楽団、関東では演奏会中止の中、バイオリニストの急遽の帰国のためコンサート・マスターを変更しての挙行、名演の誕生であった。

3月26日 東京交響楽団、常任指揮者の帰国のため曲目を全面変更し、モーツァルトの「レクイエム」とベートーヴェンの「英雄」、指揮は小田原にも度々きている小林研一郎氏。

時期を得た演目の選定であり、ピアニストでもある小林研一郎氏のウイットに富む話にも聴衆の共感が祈りを深めます。森麻季さんのソプラノは心根が美しく鎮魂にふさわしい。私は4月26日、同じメンバーのサントリーホールで黙祷にも参加しました。

3月26日 群馬交響楽団が東京すみだトリフォニーホールで、やはり指揮者の帰国で急遽交代し、まず死者を追悼してバッハの aria が演奏され、全員が黙祷。

3月26日 京都市交響楽団 震災後のキャンセルや急遽帰国する海外音楽家が多い中、ソリストのシン・ヒョンスさんは帰国せずしなやかな演奏で品格の高い演奏会であった。

以上は3月の催しであって、4月は更に多くの楽団がチャリティ・コンサートを開催しています。TVでも佐渡 裕さん始め多くの方々が参加されています。

(3) 帰ってきた

ズービン・メーターの第九

4月10日 当代の名指揮者のひとりズービン・メーターが再来日（3月に本国からの命令で帰国していた）感動的なベートーヴェンの第九演奏がなされました。彼の配慮は細部にわたり演奏前に次のような言葉がありました。「平和と同胞への愛の偉大なメッセージに彩られたベートーヴェンの作品をお聴きいただく前に追悼の意を込めてバッハの《G線上の aria》を演奏いたします。一中略一この演奏後にはどうか拍手をなさらないようお願いいたします。」《G線上の aria》その余韻を残す中、厳かに第九が始まりました。

「苦難を突き抜け歓喜に至る」をテーマとする第九は今の時期にとてもふさわしい、最も必要な感性の響きです。

習慣的になった拍手がその場を台無しにすることがよくあります。

例えばチャイコフスキーの「悲愴」は名演の時には終わっても拍手が出来ないほど感動するときがあります。指揮者オーケストラの団員と会衆の心がピタッと一瞬止まる、将に「今、ここ」の共有です。会場一

杯に何か崇高な雰囲気が出るのです。その流れを大切にしたいと願います。拍手までの沈黙の時間が長ければ長いほど評価の高い演奏となります。わたしはこのときいつも拍手をしないでほしいと感じています。拍手をしないことがその場での最大の讃辞にもなることをズービン・メーターは始めに教えられたことに私は深い共感を感じます。

(4) 言葉を越えて平和（平安）

を造り、希望を生む音楽

今まで長い時間をかけて音楽界の話をしてきましたが、それには二つの訳があります。

一つは音楽の持つ芸術性がこれほど明らかに、又、普遍的に示されたことは今までに無かったことです。世界的に活躍されているソプラノの森 麻季さんは「音楽を通して世界が平和になることを願って歌っています」と常々語っておられ、闘病中の小澤征爾さんは「音楽は命です」と言われています。この大震災が無くても日本は経済合理性が優先し、そのことによって殺伐な生活環境がどんどん進行していたときです。ほんの少しの人間性を回復するためにも、心に響く音楽を人間の命は求めていたと思います。人が”今、ここを”生きるために超合理的な予想しなかった魔物から救われたいと感じる人が非合理的な何かを求め始めていた時が来ています。

もう一つの理由は、上記に関連することですが、専門化が極度に進んでしまった現代では、精神なき専門家が多くなり、時には心情なき専門家にまで進化？している人には音楽や絵画は無価値なものと思われ、それらに用いられる時間は無駄と思われています。実はそのことによって自らの創造性を退化させていることに全く気づいていないのです。芸術こそが創造の泉という

ことを忘れてる人が多くなっています。そのような人に私はこの機会に、些かでも専門性からみれば無駄なこと、非合理的なことに、目を、耳を傾けてもらいたいと思い、長い音楽の話をしてきました。今日は5月29日ですが新聞の広告に「瞬間を生きる哲学<今ここ>に佇む技法(古東哲明)」と言う本を買って読み始めました。目次の3章に「芸術の秘密—永遠の瞬間」と題するところがあります。必然の出会いです。

(5) ウェスト・イースタン・ ディヴァン管弦楽団

5月20日ウィーンの楽友協会では私は念願であったベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」を聴く幸いを得ることができました。しかも、指揮はこの楽団を創設したダニエル・バレン・ボイムである。今回の旅の最大の目的でした。

この楽団は1999年ユダヤ系のダニエル・バレン・ボイムとパレスチナ系文学者エドワード・サイドにより設立されたもので、「共存への架け橋」を理念としています。名称はゲーテの詩集「西東詩集」から命名されています。

当日は100名に近い大編成のオーケストラ、若い精悍で爽やかな青年たちがボイムの指揮で一矢乱れぬ素晴らしい「英雄」が演奏されました。美しい調和と清澄な響きに加え第2楽章の「葬送行進曲」は良く訓練され荘厳な調べを奏でてくれました。

外貌からみても両者の区別は全く分かりません。真剣な表情で指揮者をみつめる瞳は輝いており、違いのあるままに共に在ることの可能性を音楽にのせて伝えているようでした。

聞き手の聴衆もパレスチナの平和を願って集まって来ており、彼らに惜しめない声援と心からの期待を託しており、会場の雰囲気は熱気に満たされ、今までにない胸の

高まりを押しえきれず陶醉止まぬひとときを違った国籍の人々と共に出来た夜でした。

ぶっきらぼうなピアノのソリストのお辞儀が、聴衆の鳴り止まぬ拍手、5度に渡るカーテンコールにだんだんと丁寧になり立派な紳士になっていく姿をみて、聴衆が楽団員を育てる場面も体験でき、芸術のもつ自由な呼応関係がこんなところにもあることをまなびました。彼らのそれぞれの成長と理念の前進を心から祈りながら彼らを見送って家路につきました。好きな曲を、好きな場所で、好きな指揮者で、理念ある楽団で、いいことづくめの旅が続きました。

特別寄稿の掲載について

闘病生活に入った弟と一緒に人生初めての沖縄旅行をしました。その折に色んな話をしましたが、原発について優れた考えを聞かされました。

- ① 原発がプラント設計でなく、建築設計であれば復帰にここまで困ることはない
- ② 減価償却についての会計人にならぬ現場での体験談

新しい視点が多いので寄稿を依頼しました。是非、お目通しください。

小原 靖夫

